

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：42632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02530

研究課題名(和文)多職種連携技能を涵養する園内協議システムの開発 現職保育者の先導的実践力の育成

研究課題名(英文)creating organizational consultation system that fosters inter-professional work:develop the leading practical skills of nursery teachers

研究代表者

遠藤 愛 (Endo, Ai)

星美学園短期大学・幼児保育学科・准教授

研究者番号：80641745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多職種連携技能を涵養するシステムとして、巡回相談後に保育実践を再構築するための園内支援体制に着目し、研究を進めた。特に、保育現場が巡回相談を有効的に活用するための事前・事後の工夫に焦点を当てた調査を実施し、現状の保育現場の取り組みと課題点を明らかにした。一連の研究により、保育現場が巡回相談を効果的に運用するために必要な条件を、巡回相談前の準備段階と、事後のフォローアップの2つの観点からまとめ、多職種連携技能の要素を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育現場では、乳幼児の示す行動の難しさに翻弄されず、多角的に問題を捉え解決に向けた実践ができる保育者を現場で育成することは喫緊の課題である。そのため、問題解決力を養う場である巡回相談を効果的に運用するための技能の同定が重要となる。一連の研究により、保育現場が巡回相談を効果的に運用するために必要な条件をまとめることができた。これらの成果は、特別支援教育コーディネーターなど、保育現場で巡回相談を運用する立場にある人の技能を抽出することに寄与したといえる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the in-facility support system for reconstructing childcare practice after visiting consultations as a system for cultivating interprofessional collaboration skills. In the research, we conducted a survey focusing on the ingenuity before and after the childcare site to effectively use the consultation, and clarified the efforts and problems of the current childcare site. Based on a series of studies, we have summarized the necessary conditions for the effective operation of mobile consultations at childcare sites from two perspectives: the preparatory stage before the consultation and the follow-up after the consultation. As a result, we were able to present the elements of interprofessional collaboration skills.

研究分野：特別支援教育

キーワード：巡回相談 多職種連携 保育現場 気になる子ども 保育実践 インクルーシブ保育

1. 研究開始当初の背景

地域や家庭の養育力の低下により、子育てに困難を抱く保護者への支援、虐待や障がいへの対応など、保育ニーズの多様化・複雑化に関する話題には枚挙に暇がない。こうした中、保育者の心身の疲労感・負担感が高まり、保育に対する余裕のなさから、離職や病休の他、児童への強い叱責など不適切な対応が行われることが懸念されている。このような状況を解消する一助として多職種連携（Inter-professional Work：IPW）の重要性が示唆され、保育行政においては外部専門家による巡回相談を事業化する自治体が増えている。巡回相談の効果は、保育者の乳幼児の行動問題に対する捉え方が変容し、保育実践が再構築されること、これまでの保育実践に専門的価値が付加され、自身の保育に自信がもてることなどがある。こうした効果は、乳幼児や保育実践について自分の考えを他者に伝え、外部専門家と保育者間の相互作用が活発になることで発揮される（小田，2010）。一方で巡回相談は、乳幼児の見立てにおける過度な専門家依存（浜谷，2017）や、価値観の異なる意見に対する抵抗感の問題（遠藤，2008）など、保育者の実践を支えるリソースとして機能する以前の課題が山積している。こうした問題から、専門家の参入はともすると現場の問題解決力を低下させる可能性も指摘されている（浜谷，2017）。このような混乱状況を克服し、巡回相談の効果を最大化する取り組みが必要であり、園内の問題解決力向上を目指すための喫緊の課題である。

さて、最近では教職課程コアカリキュラムや保育者等キャリアアップ研修において、保育現場が地域の関連機関との協働を図るために、多職種連携（IPW）の技能の習得は重要項目として取り扱われている。しかし、多職種連携（IPW）に関する具体的技能については、医療域において協働に関するコンピテンシーが提案されているものの、職種間の葛藤状況の解決に向けた具体的な行動技能は提案されていない。また、外部専門家からの助言を保育者が実践に活かすためには、巡回相談で外部専門家から得た助言を、自らの保育実践で実行可能な内容に変換するための園内協議を行う必要性を指摘している（遠藤・若林，2020）。こうした園内協議では、巡回相談で生じた保育者の葛藤や混乱が訴えられる事例が報告されているが、協議を開催するコーディネーターや研修担当者が保育者の葛藤をどのように扱っているか、現時点で研究知見はない。

2. 研究の目的

乳幼児の示す行動の難しさや保護者とのかかわりに翻弄されず、多角的に問題を捉え解決に向けた実践ができる保育者を現場で育成するため、問題解決力を養う場である巡回相談の効果的な運用にかかわる専門技能を同定することを目的とした。外部専門家との協議という間接的な支援が、保育者と子どもの変容という実質を伴っていることを実証的に示すことで、園内体制の機能の発揮に必要な知見の整理を進め、保育サービスの充実化を目指す。

3. 研究の方法

巡回相談を活用している幼稚園・保育所（約150園）を対象として、巡回相談の運用方法に関して、郵送による質問紙調査を実施した。本調査に回答する対象者として、園の研修担当者または特別支援教育コーディネーターなど、巡回相談の手配及び連絡調整を行う担当者を指定した。調査項目は、(a)巡回相談の導入方法、(b)巡回相談の準備、(c)巡回相談終了後の取り組み、(d)巡回相談の意義と課題、(e)その他（回答者の保育歴等）であった。これらの調査データを、以下2つのステップで分析・検討を行った。

1) 巡回相談の効果を高めるための準備や姿勢、課題点に関する分析

調査項目の中の「(b)巡回相談の準備」に対する回答に着目した。具体的には、(b-1)「巡回相談で検討対象とする子ども（または保護者）をどのように選定していますか」、(b-2)「巡回相談の実施前に、事例となる子どもの担任との間で事前に話し合いや打ち合わせをしますか」、(b-3)「事前の話し合いでは、担任とどのようなことを協議していますか」、(b-4)「外部専門家に事例となる子どもの情報を伝える際、詳細に伝えている事項は何ですか」という4つの質問に対する回答を分析対象とした。

(b-1)(b-3)の自由記述式回答については、各質問項目の回答をデータ化するための作業として、KJ法の手法を参考に分析を行った。(b-4)の選択式回答については、該当の質問項目に対して7つの回答の選択肢ごとに、チェックが入った回答の個数を量的に集計した。そして選択肢ごとに（回答数÷回答した園の総計）×100の計算式にて回答の割合（%）を算出しグラフ化した。

2) 巡回相談後の保育実践の再構築に関する具体的な工夫や課題に関する分析

調査項目の中の(c)巡回相談終了後の取り組み、(d)巡回相談の意義と課題に着目した。具体的には、「巡回相談で協議されたことや得られた情報をその後の保育に活用するためにどのような工夫を行っていますか」、「巡回相談で得られたことを活用する際に課題だと思えることは何ですか」の質問項目に対する自由記述式回答を分析対象とした。質問紙で得られた回答をそれぞれテキストデータ化し、分析ソフトKHcoder（Version 3.Beta.05）を用いて、テキストマイニングによる分析を行った。

4. 研究成果

1) 巡回相談の効果をもとめるための準備や姿勢、課題点に関する分析

「巡回相談で検討対象とする子ども（または保護者）をどのように選定していますか」という質問項目に対しては、「担任を選定する」と、「職員間で検討する」が最も多く、それぞれ全体の約3割以上を占めた(図1, 参照)。

また、(b-2)「巡回相談の実施前に、事例となる子どもの担任との間で事前に話し合いや打ち合わせをしますか」という質問項目には、7割以上の園が「はい」と回答し(図2, 参照)、打ち合わせの内容には、「担任として困っていること」、「対象の子どもの実情」について、「現在の支援・対応方法」などが回答の多くを占めた(図3, 参照)。また、図4で示したように「外部専門家に事前に伝える事例の情報」においても、同様の項目が高い値を占めており、これらの結果が連動していることがわかる。

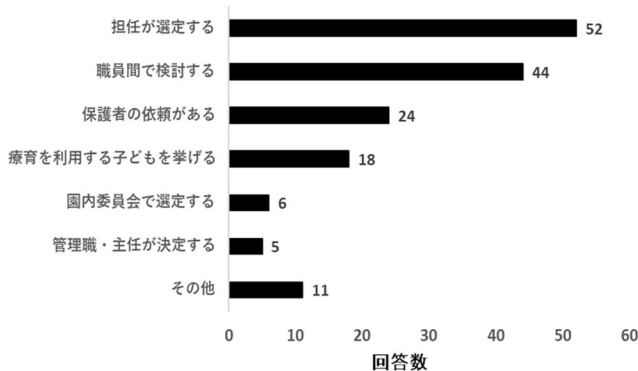


図1 巡回相談で検討対象とする子どもの選定方法

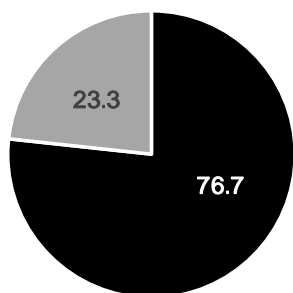


図2 担任との事前打ち合わせの有無(全体)

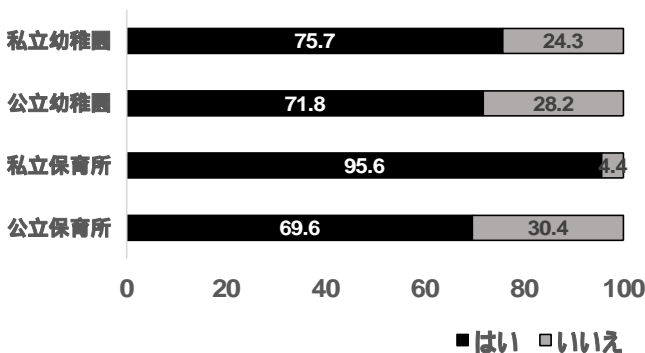


図3 担任との事前打ち合わせの有無(種別ごと)

これらの結果から、多くの保育現場は、外部専門家による巡回相談に担任を支える機能を見出し重視していることがうかがえる。そして、巡回相談の当日を迎える前に、「担任として困っていること」などの主訴を明確にし、事例の子どもの実態把握に関わる情報を担任やその他の職員に確認する作業を行っている。このことを踏まえると、保育現場の研修担当者は巡回相談を企画する際、担任の主訴を明確にし、外部専門家になるべく具体的な問題提起ができるように努めると推察される。事例検討にあたっては、具体的な問題提起から開始し、問題の明確化、解決策の捻出、意思決定、解決策の実施と検証といった過程をたどるが、保育現場においてもこうした事例検討の手順が一般化していることがうかがえる。

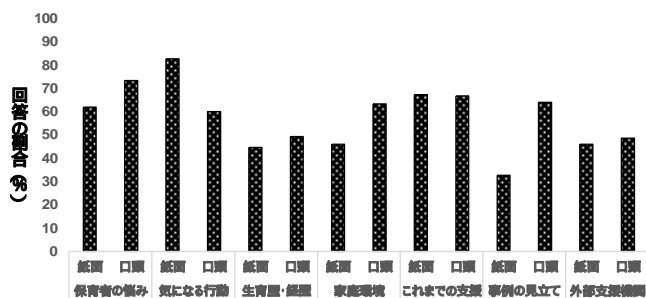


図4 外部専門家に事前に伝える事例の情報

一方で、公立幼稚園・保育所、私立幼稚園の2～3割は、「巡回相談の事前の打ち合わせを行わない」と回答しており、管理職や研修担当者が主導するケースも見られる。この理由としては、「打ち合わせの時間がとれないため」などの回答が多く見られた。さらに、事前の打ち合わせの内容には、「現在の支援・対応方法」(18 切片, 16.7%)と回答した園は2割未満であった。先行研究では、巡回相談の実施前に、検討対象となる子どもの情報をまとめ、これまでの自らの保育やかかわりを振り返ることそのものが、事例の子どもの実態と自らの保育の省察を促進する効果があるとしている。巡回相談前の事前の打ち合わせは、巡回相談をスムーズに進行するための情報収集であるだけでなく、保育に関する語りを行うことによる深い学びの効果が見込まれる。保育現場において、こうした効果を意識しながら、事前準備にあたることが重要であろう。

次に(b-4)「外部専門家に事例となる子どもの情報を伝える際、詳細に伝えている事項は何ですか」という質問に対する回答として、「生育歴・経歴」が紙面・口頭の双方、「家庭環境」の紙面が5割未満であり「外部支援機関」についても紙面・口頭双方とも5割未満であった(図4, 参照)。生育歴や経歴、家庭環境などの情報は、保護者から収集する情報であり、子どもへの支援に関して保護者との連携がとれていることで入手できるものである。また、外部支援機関についても、検討対象となる子どもが外部支援機関を積極的に利用している必要がある。巡回相談で

検討対象となる子どもは、保護者との連携がとれていないケースも多く、そうしたケースの場合には、外部支援機関の利用などの支援基盤ができていないことが予想される。巡回相談を運用している保育現場では、園内連携が十分に機能している園が多い一方で、保護者や外部支援機関との連携など、園外連携の困難さがうかがえる結果となった。

さらに同じ質問に対する回答として「事例の見立て」を選択した園が他項目に対して全般的に低いことに加え、紙面が32.7%に対して口頭が64%と、同じ項目内で最も差が大きい結果となった。主訴の明確化や事例理解のための情報収集に積極的である一方で、保育者自身が事例の子どもの見立てを提供するまでには至りにくい現状がうかがえた。巡回相談の準備段階で、保育者が子どもの情報収集は行っても見立てには消極的である理由として「現場の保育者は「個の理解」よりも「保育の運営上の問題解決」に関心を向けやすいことが影響している可能性がある。

2) 巡回相談後の保育実践の再構築に関する具体的な工夫や課題に関する分析

質問項目「巡回相談で得られた情報を保育に活用するための工夫」に対する回答の特徴として、「共有」「全職員」「情報」「会議」等の上位抽出語を中心として、園内連携に関する語が頻出した。さらに図5の第1カテゴリーでは、これらに加えて「対象児」「記録」「支援」などの抽出語も含まれ、各語の共起関係も強い傾向が見られた。検討対象となる子どもの理解と支援について職員間で足並みをそろえる内容であることがうかがえる。そしてこれらを実現するために巡回相談で協議された内容を記録に残したり、改めて会議を設け内容を確認するなどの具体的な動きにつなげていることがわかる。

さらに第3カテゴリーでは、「個別の指導計画」「具体的」「得る」「方法」「取り入れる」などの頻出語との共起関係も強い傾向が見られた。巡回相談で得られた情報を個別の指導計画の枠組みに合わせて再構築し、実践内容を具体化させる手続きを試みている園があることがうかがえる。本研究の結果において得られた園内連携に対する保育現場の意識の高さは、こうした様々な調査からも裏付けられる結果であるといえる。一方で「巡回相談で得られたことを活用する際の課題」を尋ねる質問項目への回答では、図6の第4カテゴリーに含まれる「保護者」「理解」「伝える」「家庭」「連携」等、頻出語の上位に含まれている語が共起していた。園側が保護者との連携を強く望むも、実際にはつながりにくい現状が語られている。検討対象の子どもの理解と支援に向けて、園内での情報連携に意欲を高めるとともに、保護者に対しても同様の理解と行動を求めている様子が見られる。

次に、図6の第1カテゴリーでは「個別」「対応」「全体」「クラス」を中心として、それぞれ「関わる」「他の子ども」「集団」「支援」「必要」「多い」「人員」などの頻出語につながるという共起関係が見られた。巡回相談における外部専門家の助言の視点は「個別支援」であり、これら「個別支援」にまつわる助言は、全体保育の運営と拮抗するととらえている園が比較的多く存在することが推察される。

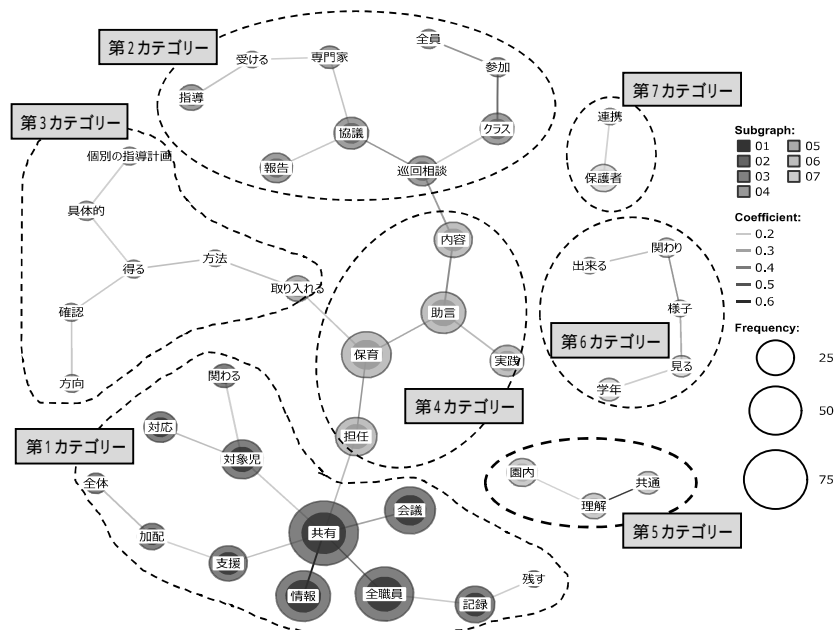


図5 「保育に活用する際の工夫」に関する回答のサブグラフ

しかし、図5の「保育」「助言」「担任」「内容」などの頻出語の共起関係が認められた第4カテゴリーでは、「巡回相談で受けた助言を実践し、どのように対象児が変わったのか、担任を中心に見極める」といった検討対象となる子どもの変化を負う目線や「助言いただいたことを保育

の内容に取り入れるために、「必要なものをそろえたり環境面を整える」など、集団・個別に終止せず環境面へ目を向けるようになったことがうかがえる記述がみられている。巡回相談後には、個別か全体かの二項対立の議論だけでなく、「環境調整」「行動変化」の視点を踏まえた保育の再構築が行われることが重要であるといえる。

最後に、図6では、上位頻出語ではないものの、第6カテゴリーに含まれる「日常」「姿」「違う」「行動」「観察」等、各語の共起関係が非常に強い傾向が見られた。保育者が検討対象の子どもの困難場面を共有できていないと感じるとき、外部専門家との間に齟齬が生じやすい可能性を示唆している。これらの問題は、巡回相談後の保育の再構築に関する課題という以上に、巡回相談時、あるいはその準備段階で生じている課題であるといえる。

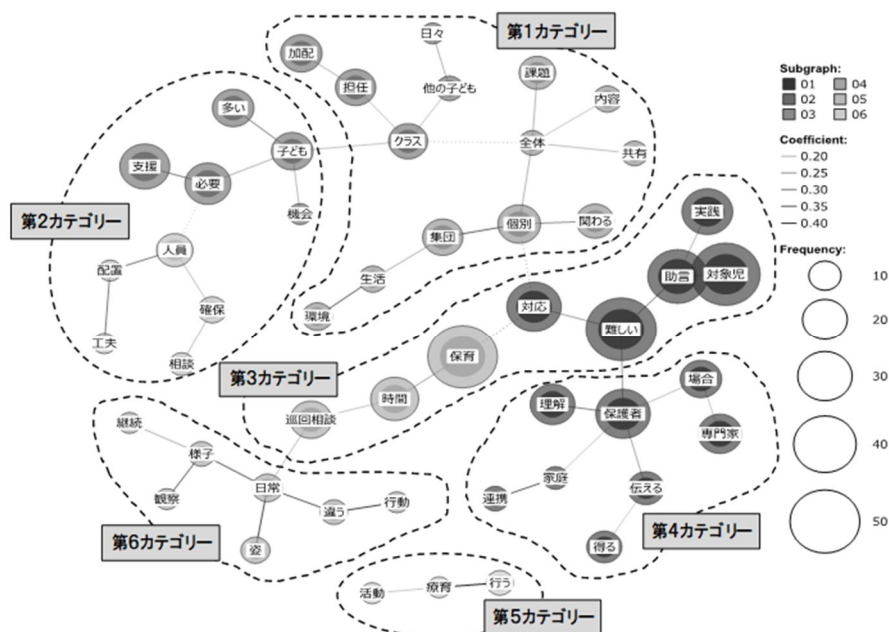


図6 「得られた情報を活用する際の課題」に関する回答のサブグラフ

【引用文献】

- 遠藤愛 (2008) : 特殊学級教師の指導行動の変容を促す介入 教師の抵抗感を回避するためのフィードバックの工夫 . 教育心理学研究, 56, 116-126.
- 遠藤愛・若林上総 (2020) 幼稚園における個別の指導計画の運用プロセスへの支援 園内支援体制の変化に着目して . 発達人間学研究 20 (2), 61-67.
- 浜谷直人 (2017) : 発達障がい児など困難をかかえた子どもの保育 自己肯定感と仲間意識の視点から . 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 5・6, 27-46 .
- 小田礼子 (2010) 保育者の資質向上のためのカンファレンスについての一考察 実践者の「気づき」を中心に . 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 3, 111-121.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 遠藤愛	4. 巻 22
2. 論文標題 保育現場における巡回相談後の保育の再構築に関する実態調査 - テキストマイニングによる分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達障害支援システム学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤愛	4. 巻 55
2. 論文標題 保育現場における巡回相談の事前準備 保育者と外部専門家の対話促進に向けて -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 星美学園短期大学研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤愛	4. 巻 54
2. 論文標題 保育巡回相談における意義と課題に関する予備調査 研修担当者へのアンケート調査を基に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 星美学園短期大学研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤愛 若林上総	4. 巻 20
2. 論文標題 幼稚園における個別の指導計画の運用プロセスへの支援 園内支援体制の変化に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達人間学研究	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 遠藤愛
2. 発表標題 保育現場における巡回相談の事前準備に関する調査 外部専門家に伝える情報に着目して
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 遠藤愛
2. 発表標題 幼稚園における巡回相談後の実践上の課題 テキストマイニングによる定性分析を用いて
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 遠藤愛
2. 発表標題 幼稚園の特別支援教育コーディネーターにおける担任支援
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会（口頭発表）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------